





























































































諸鈍シバヤ 国指定重要無形民俗文化財

指定年月日 昭和51年5月4日、 所有地 鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍。

「由来」 諸鈍シバヤは壇之浦の合戦(源平の戦い約800年前)に敗れてこの島に渡ってきた平家(平資盛一族)の人々が島の人々に教えたのが始まりだと言われている。また古来交通の要所であった諸鈍に南の琉球から北の大和から(室町期の古歌舞技の流れをくむ芸能と言われている)の文化が伝播し、多彩な諸鈍シバヤが結実したと言う説もあり、芸能史的に極めて貴重なものとされている。シバヤは昔は20種目もあったといわれているが現在では11種目に減り(特に定められた上演日はない)時折旧暦9月9日の大屯神社祭で部分的に上演されるようになった。(全種目上演されるのは、集落的慶事に限られ、10年位に一度行なわれる。)シバヤ(出演者は総て男性で紙面(カミツラ)を付けるのが特徴である)は拍子木を先頭に三味線(サミセン) 鐘、大鼓、ホラ貝、指笛(ハト)に囃され、掛声勇ましく手振り足拍子を合せながら楽屋入りから始まり数々の興味深い踊りが演出される。殊に獅子退治(シシキリ) 美女(タマティユ)と大蛇が出る人形芝居などは見物人を引きつけ人々の心をゆさぶる芝居であると言われている。

瀬戸内町諸鈍シバヤ保存会



























諸鈍

リリーの家

寅さん「飛英道」とリリー「浅丘ルリ子」が
一緒に暮らしていた家
この家の裏で満男「吉岡秀隆」と寅さんが
劇的な再会をはたした

満男「じゃ、お姉さんは一人で暮らして
るんですか?」

リリー「ひとり居候がいるけどね。
その人もあんたみたいに文無しなの。
でも遠慮はいらないのよ、気楽な人
だから。あ、いたいた、ねえ、寅さ
ん 寅さん」

ギョツとしてリリーが声をかけた
方を見る満男。

石垣越しに寅がのんびり顔を出す

寅「おう、帰ったか」

リリー「お客さん連れてきたわよ、この人」

寅「誰たい?」

満男「たまりかねて大声を出す。

満男「誰じゃないよ、俺だよ、おじさん」

寅、ハツと身を起す。

寅「おう、満男か」



























諸親
リリーの家（諸親）、突然の貴の登場に驚く満男。家の中の撮影は大船撮影所のセットで行われた。

満男を自殺志願
ようとするリリー









